

『廃園の桜』

著：高塔望生

ill：緒田涼歌

「お待たせいたしました。シュウでございます」

支配人の声と同時に、鷹村がちらりとこちらへ顔を向けた。

途端、鷹村は顔色を変えて立ち上がった。

「ここで何をしている!？」

怒(ど)気(き)を孕(はら)んだ低い声で詰(きつ)問(もん)され、瑛彦は口ごもった。

「…えっ……、あ、あの……」

思わず、助けを求めるように岩本の方へ目をやった瞬間、頬に鋭い痛みが突き刺さっていた。

目眩に襲われたようによろめいた瑛彦を、隣にいた支配人が慌てて支えてくれる。

「お客様、暴力は困ります」と支配人の低いけれど毅然(ぜん)とした声が耳元で響き、瑛彦はようやく自分が平手打ちされたのだと気づいた。

頬から耳にかけて、じんじんと熱く痺(しび)れている。

驚きとショックで声も出なかった。

出(で)逢(あ)ってからずっと、紳士的で優しくかった鷹村が暴力をふるうなど信じられない。

そもそも、何がここまで鷹村を逆上させたのかさっぱり分からなかった。

打たれた頬を押さえるのも忘れて惘然と立ち尽くした瑛彦の腕を掴むなり、鷹村は力任せに引きずるようにして出口へ向かって歩き出した。

「放してください」

瑛彦の抵抗をものともせず、鷹村は空いている方の手で器用に携帯電話を取り出し一言二言話をしながら大股でサロンを突っ切っていく。

その様子を、他の客やホスト達が一様に驚いた顔で見つめている。

「お客様、お待ちください」と呼びながら追いかけてこようとした支配人を、岩本がなだめている声が微かに聞こえてきた。

サロンからロビーへ出てくると、フロントの係員が慌てた様子で飛んできて鷹村の前に立ちはだかった。

「お客様。ホストの店外への同伴には、予めご予約とお手続きをお願いしております」

「どけっ！」

慇(いん)懃(ぎん)な物言いに鷹村が口調荒く言い返した時、背後から「通してやって。手続きなら俺(俺)があとで代わってやるから」と岩本のわざとらしいため息交じりの声が聞こえた。

瑛彦が必死に振り向くと、岩本がしてやったりという顔でサロンの出入り口のドアに寄りかかっている。

「い、岩本先生っ……」

「尚樹！ この落とし前は高くつくぞ。覚悟しておけよ」

助けを求めるように呼んだ瑛彦の声に、鷹村の凄味の利いた声が被(か)さる。

「あー、はいはい。いいから、痴(ち)話(わ)ゲンカも別れ話もよそでやってくれる？ こは楽しく夢を買う場所なんだからさ」

悪びれた風もなく肩を竦め、茶化すように答えた岩本を瑛彦は眉をひそめて見つめた。

痴話ゲンカだって!? 別れ話とはなんのことなのか――。

岩本の傍らで支配人が苦(に)が(り)きった顔で小さくうなずくと、立ちはだかっていたフロント係は静かに一礼して一步退いている。

その前を、瑛彦は鷹村に有無を言わず引きずられていった。

シェリスの外へ出てくると、瑛彦はなんとかして掴まれた腕を振り解こうともがいた。

「鷹村さん、放してください！」

すると、鷹村が刺すような目でギラリと振り向いた。

「もう一度殴られたいのか!？」

鷹村のあまりの剣(けん)幕(まく)に、瑛彦は気圧された思いで立ち竦んだ。

祖父も父も昔気質(かたぎ)だったから、幼い頃から厳しく躰けられて育った。

それでも、本気で顔を平手打ちされたことなど、今までにただの一度もない。

突然の暴力に対する驚きと怯(おび)えは、瑛彦を金(かな)縛(しば)りのように動けなくしてしまっていた。

そんな瑛彦の前へ、ハイヤーが一台するすると近づいてきて停まった。

どうやら、駐車場で待たせていたのを携帯電話で呼んだらしい。

運転手が恭しくドアを開けてくれた中へ、鷹村は瑛彦を突き飛ばすようにして押し込んだ。

続いて鷹村が乗り込み、バタンとドアが閉められる。

「出してくれ。帰る！ 飛ばせるだけ飛ばしてくれ！」

まるで穢(け)が(ら)わしいところから一刻も早く立ち去りたいとでも言いたげな勢いの鷹村の声を、瑛彦は竦み上がったままだに惘然として聞いていた。

元麻布のシェリスから鷹村が住む青(あお)山(やま)のマンションまでは、あつと言う間だった。

猛スピードで走り出したと思った途端に停まった車から引きずり降ろされると、瑛彦は見上げるようなタワーマンションのエントランスロビーへ連れ込まれた。

高層用エレベーターが一気に上昇する間、鷹村は宙を睨(にら)むように真っ直ぐ前を見据えたきり、一言も口を利かなかった。

鷹村に本気で打たれた頬は、まだじんじんと痺れている。

頬の痛みと熱は、瑛彦の中で次第に苛立ちとなって沸き立っていた。

自分が何をしたというのだ。

いったい、鷹村が何をそんなに怒っているのかさっぱり分からない。

瑛彦が唇を噛み締めた時、エレベーターは二十二階で静かに停止しドアが開いた。

目の前にあったドアをタッチキーで解錠すると、鷹村は瑛彦に向かって顎(あご)をしやくった。

「入れ！」

瑛彦が躊躇していると、鷹村の舌打ちが聞こえた。

肩を小突かれよろめくように玄関へ足を踏み入れた瑛彦の背後で、重厚なドアがガチャリと閉まる音が響いた。

閉鎖された空間にふたりきりになったと思った途端、瑛彦は鷹村の方を振り向いた。背筋を走る怯えを堪え、瑛彦は「僕が何をしたって言うんです!？」と声を張った。

「なんだと!？」

目を眇(すが)め睨みつけた鷹村に、瑛彦は波立つ感情のままに言葉をぶつけた。「鷹村メディカルセンターの入院費があんまり高くて払えないから、岩本先生の紹介でアルバイトをただけなのに。そのどこがいけないって言うんですか!？」

「君は本気でそんなことを言ってるのか!？」

怒りも露(あら)わな凄味のある低い声に、瑛彦はごくりと唾を飲み込んだ。

「話にならないな」

また殴られる――。

思わず首を竦め身構えた瑛彦の腕を掴み直すと、鷹村は大股で廊下を歩き始めた。

「放してください！」

「うるさい、暴れるな！」

静かな廊下に、ふたりの声が交錯する。

鷹村が奥まった部屋のドアを開けると、そこは寝室だった。

二十畳ほどもある広々とした部屋に、キングサイズのダブルベッドが悠々(ゆうゆう)と置かれている。

そのベッドへ、鷹村は瑛彦を突き飛ばした。

本文 p129～135 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>